

長谷川栄先生へのお祝いの言葉

実証的授業研究

新井 孝喜

長谷川先生、筑波大学のご退官おめでとうございませう。

筑波大学で過ごさせていだいた六年間、本当に多くのことを学ばせていただきました。直接ご教示いただいたことはもちろんですが、先生の研究姿勢から、「学究」とは何であるのか、肌で感じとらせていただいたように感じています。初めて先生にお会いした時—おそらく大学院受験のご挨拶にうかがった時のことだと思ひますが、研究者という言葉がぴったりの先生だなあと印象を持ちました。こと研究面に関しては、そのイメージがいまでも強く残っています。

特にいくつか覚えていふことがあります。シユタイナ—教育をやりたいという学生がいた時に、私もドイツ語の論文を読んでいる場に入れていただいたことがありました。そこで先生は、「シユタイナ—だからここはこう

いう意味」と読むのではなく、「ドイツ語としてこうだ」と一貫して解釈されてきました。このため、独特の用語で難解という先入観を持っていた私も、オーソドックスな教育思想の流れの中でシユタイナ—が主張していたことを読みとることができたように思ひます。

同じように、「一つの花」の授業分析をしていたときも、「特別の立場だからこういふ教授行動をした」といふ解釈をせずに、まずは、授業の事実の把握をし、そこから教授の論理や方略を浮き上がらせていくという先生の研究の立場は、私にとつて新鮮なものでした。私たちは、どうしても先入観でものを見失ひます。研究対象の事実とそこにある論理に基づいて研究は行われなければならぬ、という姿勢は、先生から学ばせていただいた最も大きなものです。

そして、いわばその「教育方法学における堅実な実証主義」は、おそらくは富田竹三郎先生以来の教育方法学研究室の研究の伝統なのかもしれませぬし、「長谷川シユ—レ」とくくるとしたら、先生から薫陶を受けた者た

ちが研究の基盤に持っているものなのだと思います。それが、研究に対する責任感を生じさせていると言ってもよいのではないでしょうか。

私はまだまだ重たい研究もできていませんし、やっと大学教員として一步を踏み出したところです。筑波大学教育方法学研究室の一員として、今後、教育方法学の研究と教員養成に貢献できればと思っておりますが、まだまだ私には先生のお導きが必要だと痛感しております。ちょうど、私の研究室の窓から筑波山が見えます。忙しい中で、ふと外に目をやると、背伸びをしないで、堅実な歩みを重ねていかなくはないけないんだよ、と先生にご指摘いただいているような気持ちにさせられます。長谷川先生、公私共々本当にお世話になりました。筑波大学を去られても、折に触れご指導くださいますようお願い申し上げます。

個性を伸ばす教育を実践された先生

大河原 清

私は、一九八〇年四月に筑波大学大学院に、何とか基準点をクリアーして、下から二番目で滑り込ませて頂きました。入学後、長谷川栄先生のお話ですと、大抵、それは酒が入ってからのお話なのですが、入学審査のために提出した論文に目を通され、「これじゃ、将来やつていけるかどうか大変心配だ」と思われたそうです。これもまた入学後のもう一人の先生のお話ですが、年齢が比較的行っており、諸々を配慮して、入学させるべきかどうか大変迷ったとのことでした。入学審査のための会議が、私一人のために、休憩を挟んで都合三回も延長されたとのことでした。最後に方法学研究室の先生方全員が、つまり長谷川先生から、佐々木俊介先生、川合治男先生、そして渡辺光雄先生という順で一人ずつ「責任を持ちますから」という発言をされ、やっと決着されたとのことです。

岩手大学に就職後、文部省の内地研究員として、一九九一年五月一日から一九九二年二月二九日までの十か月

間、再び私は筑波大学教育学系の長谷川先生の下で研究する機会を与えられ、先生のご指導のもと一九九四年の十一月末に学位を得ることができました。

このように、私が研究者として歩み出すことができたのは、方法学研究室の諸先輩諸先生方のご指導をはじめ、特に長谷川先生に負う所が非常に大きいのがあります。長谷川先生には、自由に、そして伸び伸びと研究をさせて頂いた思い出が沢山あります。とりわけ長谷川先生には、本来、教育とは全く縁のなかつた私を院生として受け入れ、まがりなりにも今日、大学の教官としてやっていけるようにして頂きました。元々、工学部出身の私には、教育とは何たるかも知らないにも関わらず、文章の書き方から論文の執筆に至るまで、終始あたたかいご指導と励ましを頂きました。

たとえば、一年生の夏の初めての合宿は、今でも忘れることができません。情報の概念について発表論文を合宿用として作成し、発表しました。教育用論文の何んたるかも知らない私は、情報概念とは何か、それを物理のテキストのような形式でまとめていました。むしろ教育用論文では、教育における情報概念の意義や位置づけを中心に、批判的な立場で論文を書くべきだったのです。

したがって、私の原稿を見て、先輩の中には、「こんなこと教わりにわざわざ合宿に出て来たのではない。見たくもない。」といわれたとの事です。そのため合宿での発表が始まったも、シラケと諦めのムードが漂っていました。

しかし、その時、長谷川先生は「ちよつと読んで説明して下さい。」と、一生懸命、私の発表に耳を傾けてくれたのです。論文に対して特にコメントはなく、まづいというようなこともいわれませんでした。今にして思いますが、それは長谷川先生の教育的配慮だったので。

佐々木先生には、合宿が終了して石打駅に向かう道すがら、「〜という例が情報概念なんだね。」と、打ち沈んでいる私に対して、慰めの言葉をかけて頂く状態でした。もしも、その時の合宿で、長谷川先生からも「これはどうしようもない」というようなことをいわれたなら、おそらく、私は、大学で教育に関わることもなかつたのではないだろうか、と思うのです。

もう一つは、初めて日本教育工学会の学会誌である日本教育工学雑誌に投稿した時でした。投稿したら、手直しするように戻ってきました。その時、長谷川先生は、論文を持って自宅に来るようにいつて下さいました。先

生のご自宅二階のお部屋で面と向かつて膝近づけて、ほとんど丸一日を費やして、この表現はこのように変更してはどうかと口頭でお教え頂いた後、一言一句修正して下さいました。私の元の文章には、ほとんどについて赤のボールペンで修正が加えられました。私の文章は、元の文章と似ても似つかぬものになりました。私は相手に意味を十分に伝えられる程には、文章を書くということができない状態でした。

添削指導は、原稿を作成する毎に、そして大学院を修了するまで、その後引き続き何回もして頂きました。こうした一連の事柄は、私には忘れられない思い出になりました。それは、大学の教官として学生を指導するとはどういうことかを、肌で直に教わったからです。

一人一人の個性を伸ばす教育を実践された先生、それが長谷川先生だったと思います。それは、長谷川研究室には様々な研究領域からの院生が入学し、大学の教官として多数が巣立っていつていることから分かります。包容力のある優しい先生です。ただし学問的内容に対しては極めて厳しい面を持っており、ありがとうございます。ありがとうございました。

長谷川先生の釣り

大高 泉

教育大の修士課程に入ってまもなく、長谷川先生の授業を受けた。それからもう二十年になる。ヴィルマンの『陶冶論としての教授学』を読み、ドイツ語のヒゲ文字を教えていただいた。おかげでヒゲ文字に対する抵抗感が薄らいだ。それから、学系に勤め高知大学へ転出するまでほぼ十年間ずっと長谷川先生の授業を受けた。無論ドイツ教授学の勉強のためでもあったが、何より先生のお人柄に引かれた。それ以来、先生にはご面倒をおかけし、お世話になることばかりである。高知大学からの転出の際にも、わざわざ高知までご足労いただき学部長と交渉していただいたし、定年を控えた今年度もまた学位の件でひとかたならぬご面倒をおかけしている。

最初の授業の時から、先生の印象は全く変わらない。いつも物静かで、誰に対しても丁寧で、謙虚で、控えめ、上品、冷静と、挙げたらきりが無い。先生とお話する機会は少なくないが、その度ごとに自分の軽薄さを痛感する。この印象は、大学にいるときばかりではない。ど

こに行っても全く変わらないのである。釣りにいってお弁当をひろげる時もまた同じである。

周知のように、長谷川先生は、碁、将棋、ソフト、麻雀等の達人であるが、また釣りの達人でもある。竿さばきを見てすぐ納得した。先生の生家の近くには人間川が流れていて、小さい頃から釣りをしていたそうである。先生と八溝川に釣行し始めてからずいぶん経つが、先程の先生の雰囲気・性格は、警戒心が強く賢い山女魚、高度な釣技を求める山女魚釣りの極意そのものなのである。先生はたびたび、何げない小さな落ち込みや瀬で思わぬ大物を釣り上げた。仕掛けは基本的に違わないから、ポイントの選び方か、流し方か、おもりの大きさか、などあれこれ思いを巡らしていた。

山女魚釣りには入漁券が必要である。通常は朝が早いので（朝四時頃から）、入漁券は現地交付（割り増し）、つまり川に監視員が入漁料を取り来るのである。私は、入漁券を買ってからですら、入漁券をもっているかどうか、二度ならず声をかけられ、入漁券の提示を求められる。桑原隆先生と三人で釣行したときも、監視員は私と桑原先生からはしつかり入漁料を取っていった。その監視員も長谷川先生には声すらかけなかった。この謎が、

今年の解禁日に解けた。私が五時間ほど釣ってから道路に上がってくると、監視員が、「いっぺ釣ったつべ。ずっと見てだんど。鑑札もつつか。」（たくさん釣つたらう。ずっと見てたんだよ。入漁券もつてるのか。）、と言いたにもかかわらず、しつかり見張られていたのである。きつと私は、殺気立ち、入漁料も払わず、あわよくば八溝川の山女魚を根こそぎ釣り上げてやる、といった雰囲気全身から滲み出ていたに違いない。

長谷川先生にはゆとりがある。無心でこの殺気がないのである。先生はいつも、ある程度の数を上げると、満足そうに溪流を愛で、森林浴を楽しまれるのである。「今度の解禁日には五十匹」、などというところ、先生から「そんなに欲張らないで」、とたしなめられる。先生が、思わぬ場所で大物を釣り上げるのは、山女魚が殺気を感じないためではないか、と思うのである。最初、数や型ばかり気にするが、やがては魚を見ればよい、さらには溪流を眺めさえすればよい、という溪流釣り師の発達段階があるという。先生はこの第二段階にあり、私は第一段階にいたのである。中島敦には『名人伝』という作品があるが、そこに出てくる弓の名人は、若いときにあつ

た殺気が全くなく、優しさが滲み出、弓もたず弓の名人とは誰も気づかないほどであったという。先生の山女魚釣りもこの境地に達しつつあるようである。やがて、溪流に手を入れると山女魚が集まり、魚籠を溪流に浸すと山女魚がひとりで魚籠に入ってくるようになるのではないか。

こうなると、私としてはいささか気がかりではある。「ほぼ同じくらい釣りあげ、それでも少し自分が多くまたは型がよいのを釣り上げる」ことが、一緒に釣りをする時の釣り師の喜びだからである。いやはや、こういうことを思うこと自体修業不足ということである。まだまだ先生の下で、研究は元よりまず人間の修業をしなければならぬ。

長谷川栄先生

小川博久

母校の教育方法学教室の主任教授として長い間御苦労様でした。

私は同じ教室の学兄として長谷川栄先生のお人柄をと

ても敬愛申し上げておりました。院生時代、学兄と川合治男氏と私の三人で伊那の新野の学生村で一夏を過ごしたことがありましたね。昨日のこのようです。古い民家の二階でセミの声を聞きながらドイツ語の文献を読んでいたとき、学兄はたしかOtto Weinbergの文献をいともスムーズに読み砕かれている姿を敬意の念で見守ったものでした。

また内地留学で一年間学兄の教室で学ばせていただいたことも深く心に刻まれていきます。どうかこれからもご健勝に過ごされるよう、心からお祈りいたします。

これからもお元気で

川合治男

学部の三年の時、学習指導の研究室に入ると、川越の中学校を辞めて大学院修士課程に入学したという人を富田竹三郎先生から紹介されました。それが先生との最初の出会いです。それ以来、卒業論文、修士課程受験、博士課程受験などの節目毎に、研究室の最長老をいつも頼りにしてきました。富田先生から厳しいお叱りを受け

る時には、富田先生から絶大の信頼を受けていた長谷川先輩のソフトさがクツシヨンの働きをしたので、我々後輩にとつては苦しい時の神頼みとして有り難い存在でした。先生の助け船がどんなに救いであつたことか。

夏や春の僻地学校訪問の旅行や研究合宿の計画を立てる際に、けんけんガクガクの議論で収拾がつかない時も、先生の鶴の一声で一件落着となつたりしました。研究室では弟たちから頼りにされる長男の存在でした。

そんな大樹の陰で安穩な日々を過ごしているうちに、いつのまにか先生は停年を迎えられます。なんだか大樹が急に視界から外れてしまつて、一人立ちしなければならなくなるような、そんな不安な気持ちにかられます。

大病を克服されて、以前にも増して元氣になられたことだから、まだまだ大樹は伸び続け、たくましさを増していくことは間違いありません。どうか今後ともお元氣で活躍下さい。

長谷川先生の思いで

小林 洋一郎

私が長谷川先生に初めてお会いしたのは、大学院に入學して最初の研究会であつた。所属は富田竹三郎教授の教育方法学講座であつた。長谷川先生は院生（博士課程）の最年長で、とても落ち着いた感じの穏やかな人柄でした。私が修士課程に入學したのは、昭和三十九年で、東京オリンピックが開かれた年であつた。富田指導教授は一年後に定年退官を迎えられた。その後長谷川先生は助手となられ、少し遠い存在になられた感じがしたが、研究会にはできるだけ出席され、相変わらず親切で暖かくリーダーとしての役割を果たされた。

長谷川先生は、ドイツのオットー・ヴィルマンの教育学を研究テーマとされていた。研究会における発表で最も印象に残っているのは、歴史教授法についてであつた。すなわち、教師は歴史を物語ることによつて、学習者に時代や人物をイメージさせることが大切であるという部分である。私が四年生のときの社会学の授業を思い出し納得したことを覚えている。

長谷川先生は、助手になられてまもなく結婚された。新婚の長谷川先生の奥様には、鎌倉へのハイキングで初めてお目にかかった。奥様はしつとりと落ち着いて美しい方であった。一、二度言葉を交わしたただけであったが長谷川先生にふさわしい方であると思った。また、漱石の小説「三四郎」に登場する女性の一人美禰子のイメージにびつたりの方であると思われた。美禰子は三四郎にとって魅力的な女性であり、青春時代のほのかな恋を感じさせる美しい女性として描かれている。その後奥様には、電話のお声だけでお目にかかっていない。

その後、長谷川先生が筑波大学の教授になられてからは、時々学会などでお会いすることができたが、いつも穏やかに接して下さった。時には甘えてしまうこともあり、後で申し訳ないと思ったこともあった。

ドイツ留学から帰国された後のことであるが、鳥取大付属中学校の研究会でのご指導をいただいたこともあった。個別化指導に関するお話では、内容別あるいはコース別学習の提案もあったように思う。ドイツ旅行の体験のある当時の附属中学の校長とは、後の会で楽しそうに話をされた。その後しばらくして入院されたと聞き、大変心配したが、健康を回復され安心した。

恩師富田先生のご逝去の際は、最後までお世話をされ、私も形見の書物を数冊いただいた。その中にヘルバルトに関するテキストがあり、恩師の読まれたであろう書物をありがたく頂戴した。

今年の第三十一回日本教育方法学会は、筑波大学で開催され、最後のシンポジウム「戦後五十年・いま学校を問い直す」では司会を担当された。そこでは、国民の間の学校への過度の依存と一方では学校で学ぶ意義を喪失している状況との矛盾を指摘され、生涯学習や人間形成の観点から学校教育を徹底的に問い直し、学校の役割や学力保障を追究すべきであると問題提起された。

本年度限りで筑波大学を停年退官されるのは大変寂しい限りであるが、今後とも私たち後輩のご指導をよろしくお願いしたいと思う。

長谷川先生へ贈る言葉

齋藤 信

長谷川先生、ご研究、学生へのご指導、大学の運営のお仕事と長い間たいへんご苦勞様でした。また、私のよ

うな学生に対してもご丁寧な暖かいご指導を戴きまして
本当にありがとうございます。

私の長谷川先生への思い出としてまず思い出されるこ
とは、つくばに入ってから新学期が始まり、先生の研究室に
ご挨拶に伺って最初に長谷川先生から教えていただいた
ことが、「つくばの水はそのままでは飲めませんよ」と
蛇口からポットへ水を沸かすために入れながらお話いた
だいたことです。私は追越の寮に入ったのですが、先生
のご忠告を守って水を常に沸かしておかなくてはならず
何とも不便な所に来たもんだと思いましたが、そのよう
な日常の細かいことまで気を配って下さる優しい先生だ
と感じました。

先生の授業は必ず時間どおりに始まり、遅くなっても
早く終わることは決してなく、またソフトボール大会に
は毎年必ず参加される、というようにたいへん真面目な
お人柄は学生のみならず先生方の間でも評判でした。研
究科長・学系長という多忙な職に就かれたのもそのお人
柄の故のことと感じました。

私は「つくば」の余りにも人工的な環境になじめなか
ったり、両親が交互に倒れ仕事を代わらなければならな
かったため、自分の勉強に対して全く熱を入れずにせつ

かく先生から研究会や授業でのご指導をいただいても無駄
にしてしまい、たいへん申し訳なく思い、また少しでも
勉強しておけばよかったと今頃後悔しております。その
ような不真面目な学生だった私が稚拙ながらも一応論文
を書いたときには「テーマがとても良い」と先生が褒め
て下さったことを、その時とても嬉しく思い今でも昨日
のこのように覚えております。およそ褒めるところの
無さそうなものに対してもそのような優しいお心遣いで
励まして下さり、「このような方を教育者というんだな」
と感心しておりました。

長谷川先生、本当に長い間ありがとうございます。
これからもご健康にご留意いただきご研究に、また後進
のご指導にお骨折りいただけたらと存じます。

大樹の陰

佐々木 俊 介

長谷川先生とは大学院に入学してはじめてお会いした
が、それ以後私がずっと長谷川先生の後について歩いて
きたという感じである。あるいは私が長谷川先生という

大きな樹の陰にひっそりと生きさせていただいたという所だろうか。本当に長い間ありがとうございました。

私の結婚式は秋田湯沢の田舎で行われたが、富田先生、長谷川先生ら同室の方々が東北旅行をかねて出席してくださって結婚式を盛り上げてくださった。その時の写真があるせいか、その時のことはいまでもよく覚えており、ありがたいと思っています。

長谷川先生が東京教育大学の助手のときに或るクラスの副担任をされたあと新潟大学教育学部長岡分校に勤務された。そのあとを追って私も東京教育大学の助手になり、長谷川先生が担任されていたクラスの副担任になり、学生を送り出すことになった。そしてそのあと同じ新潟大学教育学部（私の方は高田分校）に勤務した。因みにこの副担任したクラスは長谷川先生が修学旅行に沖繩へ連れていく準備をしておられたのだが、実際に沖繩へお供するという甘い汁を吸わせていただいたのは私であった。私は一週間以上もの間、船と車に酔い続けたが、沖繩の音楽と洋酒の味をここで覚えたのである。いろいろな意味で「夢」のような旅行でした。

筑波大学が誕生することになって長谷川先生が一足先に東京教育大学に移られた。後を追って私も直接筑波へ

来ることになった。長谷川先生は昭和32年に筑波に移ってこられたが、筑波では長谷川先生は学習指導学の主任教授であつたから、難しい仕事はほとんど全部ひとり引き受けてくださった。私は後ろの方でうろろうしていれば良かったのであり、まったく楽をさせていただいた。

先生が胃の手術をされたことがある。その時も先生は全く動じた色がなかった。泰然自若としておられた。私ほど言えば、手術が行われているであろう間は、家で布団をかぶって、ひたすら時が過ぎ去るよう祈っていたのである。

長谷川先生は教育学研究科長を3年、教育学系長を4年つとめられたが、強引ではないが安定感はずば抜けてあつた。思い通りにならなかつたことも多々あつたに違いないが、とにかく先生は人を責めたりされなかつたし、泣き言もほとんど聞いたことがない。やっぱり、長谷川先生は大樹だったのである。

ずっと長谷川先生の後をついてきた私だつたが、三年後やはり停年退官を迎えることになっている。いつも目の前を歩いておられた長谷川先生がおられなくなる三年間はどうかということになるのか。大きなことはできそうにないが、先生の残されたものは大切に守りたいと考えている。

「」自宅での一夜と入間川での釣り

庄 司 他人男

長谷川さんに始めてお目にかかったのは私の場合は昭和三五年の四月、富田竹三郎先生のゼミにおいてでした。長谷川さんは数年間中学校での教職経験を経て進学されたとのことで、まだ修士2年でした。それから早くも三五年が過ぎ、今年で停年を迎えらるとは、本当に時の流れの速さに驚くばかりです。

これまでの三十余年の間、私はそれぞれの段階で、研究の上だけでなく貴重な多くのご教示をいただいています。ありがとうございました。

その最初は、ゼミでのレポートの仕方に関してでした。当時、私の教育学に関する学習経験は主として教員免許取得に必要な範囲にとどまっていたので、大学院ゼミでどのようにレポートするかは緊急かつ切実な課題でした。具体的には、原書講読の仕方や、修論に関わる基本文献のレポートの方法に関するものでした。それらに関する長谷川さんの進め方は、直接のモデルとして本当に示唆に富むものでした。

修論では、私はエッセンシャルイズムの代表と目される H. C. Morrison をやることにしましたが、長谷川さんの Piirainen 研究はすでに修論として相当の蓄積と深まりに達しておりました。しかも人物研究という点では共通する面がありましたので、研究方法の面で大いに参考になりました。

その後、長谷川さんは当時西ドイツで注目されていた範例方式の研究にも取り組んで研究の幅を広げられました。そこでは中学校教師としての経験が存分に生かされ、実際の単元構成や授業展開に及ぶ実践的な考察がなされていきました。このように古典的な教育学研究と現代的かつ実践的な研究を車の両輪のように進める研究姿勢は私にはまことに羨ましく、貴重な示唆となりました。しかし、それはなかなか難しいことで、私は二十近くも経ってやっと手がけることになりました。

その後も、教育方法研究会などの場で研究方法論などの面で、最近に至るまで何かとご助言いただいています。ありがとうございました。

もう一つ想い出されるのは、研究とは全く別の面ですが、しばしば碁を打っていたことだと思います。私は学部生時代に寮の先輩に半ば強制的に囲碁を教えられました。

が、それがその後これほど役に立つとは全く予想もしませんでした。

そのおかげで、長谷川さんに連れられて池袋東口にある碁会所で時折お手合わせすることができました。また、年二回の厳しいきびしい研究旅行の夜も、発表の後は楽しい一時を過ごすことができました。棋力は長谷川さんが二目ぐらい上ですが、熱が入ると打つ手にも力が入り、音がうるさくて眠れないと富田先生に注意されたこともありました。

卒業後は私も少しずつ力がついた時期もありましたので、今度こそは勝ち越せるのではないかと秘な自信をもつて対局したこともありました。つい先日、日本教育方法学会筑波大会終了後、土浦での集まりの夜しばらくぶりで楽しみました。力の方は依然として縮まりませんでした。

しかし、何と言っても鮮烈に脳裏に焼き付いているのは、博士課程入試に失敗して失意のどん底にあった年の初夏、飯能のご自宅にお招きいただき、一夜まことに心あたたまるご馳走をいただき、翌日は入間川に釣りに連れて行っていただいたことです。

大学院に入る前に私は二年間足立区の小学校に勤務

し、遠足で飯能にある天覧山や名栗川に行ったことがありました。ですから、飯能は東北出身の私にも凡その方向感覚があり、たいそう懐かしい土地にもなっていました。魚はそれほど釣れませんでした。が、ご一家のお心遣いと、初夏の水の感触の爽やかさは、私にはこの上ない励ましを与えてくれました。終生忘れ得ない思い出となることでしょう。

この四月からは、公私ともに新しい環境のもとで第二の人生を歩まれるとのことですが、奥様ともどもご健康にご留意の上、ますますご活躍されますとともに、囲碁の腕もいつそう研かれますようお願い致します。そして、これからも時にはお手合せいただける機会を楽しみにしております。

長谷川先生の退官に寄せて

— お礼の言葉 —

助 川 晃 洋

長谷川先生に指導教官をお引き受けいただき、ご指導をしていただくようになってから、もう四年目になる。

長谷川先生の書かれたオットー (Berthold Otto) についての論文を読み、筑波大学大学院の受験を決心した大学四年の夏の日が、ついこのあいだのこのように思い起こされる。そういうえばその論文を読んでいたとき、突然の夕立が降ってきたのであるが、夢中になっていたので洗濯物を取りこむのが遅れ、びしょぬれにしてしまった。そんなことがあった。それから今日に至るまでの日々を振り返るに際しては、「光陰矢の如し」という言葉の意味を実感せずにはいられない。しかし月日の経つのが速く感じられるというのは、毎日が充実していたことの何よりの証拠であろう。そして日々充実した研究活動を私に送らせてくれたのが長谷川先生であった。常に学問的な厳しさを自らに課される長谷川先生の精神的態度の影響下にあるからこそ、私は有意義な院生生活を送れているのだと思う。

私は卒業論文作成のために、篠原助市の著作をよく読んでいた。ほとんどすべてを読破したと思う。そして篠原教育学を通して、ドイツ教育学への興味を喚起されていた。千葉大学教育学部を卒業後、私はドイツ教育学研究を志して大学院に入学したのであるが、それまでドイツ語を勉強した経験が全くなかった。アルファベットの

発音も知らなかった。ドイツ語に関しては、完全な落ちこぼれだったのである。長谷川先生もあきれていたに違いない。しかし長谷川先生は、そんな私を見捨てることなく、一緒になってドイツ語の文献を読んでくれた。最初に読んだのは、確かモレンハウアー (Klaus Mollenhauer) の「Erziehung und Emanzipation」だったと記憶している。そして次に読んだのが、ノール (Herman Nohl) の「Die pädagogische Bewegung in Deutschland und ihre Theorie」である。私は、その時間を勝手に「読書会」(または「ドイツ語」と名付け、手帳にその日程を書き込んでいた。読書会の場所は教育学系長室か長谷川先生の研究室であった。「芋虫が葉っぱを食べるくらい」のスピードでしかドイツ語の読めない私の語学力が原因で、読書会では、一日で数行しか進まないことが幾度もあった。当時長谷川先生は教育学系長の要職にあり、その多忙さは院生の私にも十分に理解できていた。しかし長谷川先生は貴重な時間を私のために割いてくれて、私のいい加減かつ不正確な読みや訳文に注意深く、辛抱強く耳を傾け、そして丹念に誤りを直して下さった。その読書会関係の記録は大学ノート約十冊に及んでいる。こ

のノートは私の宝物であり、大事な研究の礎石となっている。私が拙いながらもいくつかの論文を学会などに発表できているのは、この私的な読書会で、教育学研究とドイツ語のABCを直接に、懇切丁寧に教えていただいたからにはかならない。予習は決して楽ではなかったし、またその時間は私にとって大変なプレッシャーを伴うものであったから、当時はその時間が終わるとホッとして、院生研究室でよく昼(夕?)寝をしたものだった。逃げ出したいと思ったことも一度や二度ではない。しかし多少はドイツ語が読めるようになった現在では、貴重な時間を私のために割ってくれた先生のありがたさを、私は身にしみて感じる事ができる。ここに心からの謝意を表明したい。またこの読書会の最中に、私は長谷川先生から一冊の本をいただいた。それはノールの“Pädagogik aus dreißig Jahren”という本であった。これはノールの「教育的関係」(pädagogischer Bezug)論に関心を寄せる私にとっては、「超」の字がいくつもつくほどの必読文献であり、それだけにこの本を頂戴できたことがとてもうれしい。現在私の実家の書棚に並ぶ唯一のドイツ教育学の文献である。その姿には貫禄があ

る。コピーとは違って、手にするとドイツの肌触りがする。本物の重みをズッシリと感ずることが出来る。一生大切にしたいと思う。

また長谷川先生は、私の論文やレポートにいつも目を通してくれて、朱を入れて下さった。私は無学のくせに強情だったから、ときに長谷川先生の指摘をないがしろにしたこともあった。また非力な故に、長谷川先生のおっしゃったことの意味が理解できないこともあった。しかし最近になって、長谷川先生の指摘がいかに適切であったかを実感している。長谷川先生は、私の底の浅さを見抜いていたことだろう。わかったような態度をとったことを思い起こすと、とても恥ずかしい。この論文集に載せていただいている論文にしても、以前長谷川先生に見ていただいたものである。論文の出来が先生の期待に応えられるものになっていくかについては自信がない。いつかその評価をじっくりと伺ってみたいと思っている。しかし内容が稚拙なことなど最初からわかっている。ただドイツの教育学・教授学の研究に長い間従事されてきた長谷川先生の退官記念論文集に、私はどうしてもドイツ教育学関係の論文を寄せたかった。ドイツ教育学を研究対象にした論文を、『教育方法学研究』からなくし

たくない。このような気持ちから、今回私は拙い一論文を投稿させていただいた。

私は、長谷川先生の筑波大学での最後の直弟子になった。学問を志しての大学院入学以来、これまで本当に多くのことを教えていただいた。また授業、研究会や合宿、お酒の席やソフトボール大会などでの思い出も数多い。それをこのわずかなスペースで書き尽くすことは、当然不可能である。今後は長谷川先生から受けた教えを自分なりに消化し、血肉化し、それを研究の、そして人生の指針としたいと思っている。ただ私は、まだ若いし、あまりにも未熟である。長谷川先生には、個人的な場や教育方法研究会などで、これからもいろいろとご指導をしていただければと思う。もしそれが可能ならば、まさに至上の喜びである。ここでは「どうもありがとうございます」と感謝の言葉を贈るのが本筋かもしれないが、私はそれに「今後ともよろしく願います」と付け加えたい。

私は現在ドイツ南西部ネッカー河畔に位置する、緑の谷間に木組みの赤い屋根の町チュービンゲンで、これを書いている。ゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe) もスイス旅行の途中、寄り道のためらわなかったというこの大学町は、戦争の傷もほとんどなく、ロマンチック

なたたずまいが本場に美しい。長谷川先生をはじめとした多くの先生方や関係者の方々に尽力して頂いたおかげで、私はチュービンゲン大学に文部省の「平成七年度学生国際交流制度に基づく派遣留学生」として在籍する機会を得ることができた。ヘルダーリン (Friedrich Hölderlin) 、ヘーゲル (Georg Wilhelm Friedrich Hegel) 、シェリング (Friedrich Wilhelm Joseph von Schelling) といった、ドイツが誇りとする世界に知られた詩人、哲学者、学者の多くが、ここで青春の日々を過ごしており、おそれ多くも私は彼らの後輩になってしまったわけである。本来ならば教育方法学研究室の末席をけがす者として、長谷川門下の最後の院生として、長谷川先生の退官に関わる一連の行事では手足として働かねばならないのであるが、遠く離れていてはそれもできない。こうしてわずかなお礼の言葉を寄せることしかできないのは大変残念であり、また申し訳ないこととと思っている。いつかその気持ちを長谷川先生にお話ししたときに、長谷川先生は私のドイツ留学を大変喜んでくれて、そして「ドイツのお土産など買ってこなくてよい。とにかく後期論文をドイツで仕上げてきなさい。私の要求はそれだけです」とおっしゃられた。ご自身の体験に基づ

いた、ドイツでの生活に関する有益なアドバイスもたくさんして下さった。快く私をドイツに送り出してくれた長谷川先生の学恩に報いる意味でも、充実した留学生活を送り、その成果をそう遠くないうちに後期論文・学位論文としてまとめ、長谷川先生のもとにお届けすることをここに約束したい。そして長谷川先生からいただいた教えを忠実に守りながら、はるかに果てしなく続く研究の道を、牛の歩みでもよいから、たゆまず進んでいけたらと思っている。

最後になりましたが、長谷川先生が今後ともご健康のまま穏やかに過ごされ、そしてますますのご活躍をなされますよう、心からお祈り申し上げます。

一九九五年十月三日 記念すべきドイツ統一の日

チュービンゲンの自室にて記す

長谷川先生のご退官に寄せて

高橋 佳子

この度、長谷川先生のご退官の時を迎え、今、私は大いなる感謝の気持ちを含めて贈る言葉を書いておりま

す。私が、初めて長谷川先生と出会ったのは、二年前の四月に私が大学院に入学した春でした。私は、新潟生まれの新潟育ちで、新潟大学を卒業してから、筑波大学大学院へ入学しました。研究者としての道を選び、将来への期待と不安が入り交じっていた私に対して、長谷川先生は、研究者としての生き方を身をもって論じてくれた気がします。入学当初、私は論文を通して、自分の考えていることを人にうまく伝えることができず、混沌とした日々を送っておりました。長谷川先生は、そんな私を無理に急かすことなく、私のやる気に期待して長い目で見守っていて下さいました。今年、私が修士論文を提出し、修士号を取得できたのも、長谷川先生の熱意と根気のあるご指導のおかげと切に感じております。

また、長谷川先生は、未熟な私が成長できるような貴重な経験をたくさん与えて下さいました。それは、私自身の力にちょうど合った経験というよりも、むしろ、それをやり遂げることによつて、自らがもとの自分より一段階成長できるような経験だったと思います。まさに、教育者としての長谷川先生だからこそのご指導の仕方であつたと回顧しております。加えて、長谷川先生の私に對するご指導の中で、最も心に残っていることは、自分

の考えを表現することに対して先生が評価して下さったことでした。誰かが言っていることをそのまま述べるのではなく、自分の言葉として述べていくことを評価なさる長谷川先生の下で、私は、自分の本当にやりたいことを自由に伸ばし、それを人に伝えていくという極上の喜びを知ることができたと思います。

私は、学問に対する長谷川先生の誠実さに惹かれたのはもちろんのこと、ご自身の趣味である釣りのこと、また、かつて研究生生活を送られたドイツでの思い出などについて話される先生のお人柄に深く引き寄せられました。月日にすれば、二年という短い期間でしたが、研究者としての基盤をつくる上で、様々なことを教えていただいたことを感謝いたします。院生である私を、これから研究者として巣立っていくであろうことを念頭において導いて下さったことは、筑波大学での二年間の私の大きな支えでありました。

ご退官後の長谷川先生のご活躍をお祈り申しあげます。本当にありがとうございます。

長谷川先生の思い出

徳岡慶一

在学中からできの悪い院生だったので長谷川先生には何かと御迷惑をおかけしました。特に修論の時にはそうでした。気の弱い私の性格を読まれてプレッシャーをかけたようにいろいろなと御配慮をいただきました。また遅々として進まない状況を見かねて、研究環境を少しでも良くしてやろうということで、研究室のワープロを貸していただけることになりました。そして夜の静かな環境でワープロを打つことになりました。研究室にいる時間がだんだん長くなり、朝を迎えることもありました。そのとき研究室からみた早朝の景色はともきれいで、「修論を絶対に書き上げるんだ」という意欲を高めてくれました。そして何とか修論を書き上げることができました。これも先生のおかげです。ありがとうございます。

また就職後、先生にお会いするたびに必ず2つの課題をいただきました。一つは博士論文の作成であり、もう一つは結婚でした。後者の方はようやく実現し、長谷川

先生御夫妻に仲人をしていただきました。そしてとても心の暖まる和やかな式になりました。これもお二人のおかげと妻ともども感謝しております。退官に何とか間に合つてよかつたと思つています。もう一つの方はまだ時間がかかりそうです。ただ最近ようやく方向性が見えてきた気がするので、研究の蓄積を行い、いづれ何とかしたいと考えていますので、今しばらくの御猶予をお願いいたします。

長谷川先生のますますのご健勝とご活躍を心より願つております。

長谷川栄先生に捧げる言葉

西 岡 けいこ

教育学研究者になりたいと思つて筑波大学教育学研究科の受験を希望し、長谷川先生の研究室にお伺いさせていただきました。いただいたのは、わたしが30歳の時でした。遅い決断とスタートだったのですが、先生は、自分でそうしたいと思つて決めたのならばしつかりやいなさいと励ましてくださいました。その時に、わたしが事前に差し上げて

いた手紙の文面のことを話題にされて、「未熟者ですの
で・・・」という表現で自分を語っていたことについて、この年齢まで生きてきたのだからそんなことを言つてはいけない、と諭されたことが、ずしりと心に重くて、昨日のこのように思い出されます。先生は、たとえば教育学についての素養は浅くともそれなりにこれまでやつてきたことからの蓄積はあるはずだから、それを生かして伸ばしていく方向でやれるはずだ、自分のことを卑下して言い訳をしてはいけない、というような意味のことを言われたかつたように思われます。それでも、大学院に入学させていただいてからのわたしは、頑張り方ということ、即ち自分なりの研究のしかたのポイントをつかむということが、さっぱりできない状態が続いて、修士論文も2年のところが3年かかりました。ご心配の種だったような時期もあるのではないかとわたしなりにも考えてしまいます。それでも、先生としては一貫して、自分でやりたい意志をもっているのならば・・・という、厳しくも暖かい不動のご姿勢でした。そうして大学院の単位取得の後に就職のお世話をいただき、95年の春からは、さらに安定したポストへの転動をご配慮いただきました。

先生は、教育方法学研究室の安定した精神的な中心点であり、大学院生にとつては、研究ということの筋はしっかりと学びながらもそれぞれの方向に伸びていくことのできる、受容的で自由な雰囲気をつくりだしていらつしやいました。現在、わたし自身が様々な個性をもつ学生と日常的に接する立場となりますと、相手に対して安定した姿勢を保ち続けるには多大なエネルギーが必要であることを感じます。そうした思いから、改めて先生への感謝の念を強くしております。先生の今後ますますのご健勝をお祈りいたしますとともに、先生のように周囲の人々にとつての安心の位置を占められるようにわたしなりに精進していくことも、御恩に報いるひとつの方法であるかと存じます。

日本教育方法学会の思い出

樋口直宏

長谷川先生にご指導を仰いでから、六年間の月日が経ちますが、先日筑波大学で行われた日本教育方法学会第三十一回大会が、私にとつては最も印象深い思い出とな

りました。

一年前の平成六年秋、長谷川先生から一枚の紙をいただき、これを関係の先生方に配るようにと言われました。そこには「日本教育方法学会の引き受けについて」と書かれてありました。学会をお引き受けすることが正式に決まった時、大学院の最上級生だった私は、長谷川先生をお送りするのにはまたとない機会であることを思うと同時に、先頭に立つて諸作業に従事する責任を感じ、大きな緊張を禁じ得ませんでした。

新年度に入ると、本格的な実務が始まりました。広島大学との打ち合わせ、会場の確保、マニュアル作成、人員や器材の手配、会計等、作業のあまりの多さに、あらためて驚かされたものでした。準備委員長である長谷川先生のためにも、また筑波大学教育学系のためにも失敗は許されませんでしたし、その重圧は学会が近づくにつれて高まるばかりでした。しかし長谷川先生は、「学会の運営には多少の失敗があつてもいいんだよ」と、気持ちを楽にする言葉をかけてくださるとともに、自ら先頭に立つて、会場との交渉や予算の計画等の煩雑な作業や、夏休み中も含めて毎週のように行われる打ち合わせにお付き合いました。幸い、事務局長の渡辺先生の

的確な指示および諸先生方と大学院生の皆様の機微を得た対応に助けられ、無事大会を迎えることができました。

いよいよ大会当日になり、事務局の広島大学教育方法研究室の方々がいらつしやいました。それまで手紙や電話等を通して、数多くのやりとりを続けてはきましたが、実際にお会いするのはほとんどの方とはこれがはじめてであり、ここでの意思疎通がうまくいくかどうかは実は最も心配な点でした。そのような時、長谷川先生はごく自然に両大学の間をとりもって下さり、そのおかげで当日の諸作業に対しても、これ以上はない協力体制であったことができました。それでも大会中は事前の私の配慮の不足から、小さなミスが出てきました。おそらく私の知らないところで長谷川先生の気づかれたことも、数多くあつたでしょう。しかしそのような点については先生は一言も不満を述べられず、淡々と仕事を見守ってくださいました。今思うと、終始先生が見守ってくださいましたおかげで、私も安心して仕事ができただと思いません。

三日間の大会を終え、広島大学の方も合格点をつけてくださり、お帰りになりました。期間中は私は本部にいるだけで、他の皆様がすべて動いてくださったわけです

が、私の目から見ても成功した学会であつたと思います。学会の翌日には、土浦で教育方法研究会が開かれました。その帰りの車中で先生が、「いろいろと良くやってくれました。どうもありがとうございます。」とお礼を言ってくださいましたのは、いまでも忘れられません。この学会を通じて私自身さまざまな勉強ができたことを感謝するとともに、先生のご退官にあつて一つでもご恩返しができたのではないかとこのお言葉を聞いてほつとしたものでした。

先生におかれましては、今後ますますお元気で活躍されますことを祈念すると同時に、引き続きよろしくご指導を賜りますことをお願いして、お祝いの言葉とさせていただきます。ありがとうございます。

飾らないお人柄と育てのうまさ

平山 満義

長谷川先生は、「飾らないお人柄」の一言につきる。先生との出会いは私が東京教育大学院の博士課程一年に入学する直前の三月（昭和四十七年）だったと思う。当時主任教授であつた故井坂先生が、教育方法研究室に

いらっしやって「今度新潟大学から長谷川先生が助教教授として来られる。いろいろすることがあるだろうから引越しの手伝いに行つてらっしゃい。西武池袋線の小手指駅(?)の近くだ。」と我々に略図を指示された。早速集合場所と日時を確かめ院生全員で手伝いに行くことにした。そのころ私は学生結婚をしたばかりの新婚ほやほやで大宮に居を構えたばかりでだった。当時井坂先生は生活指導を担当しており、学習指導の担当教授は誰も居なくて院生のほとんどは将来が不安で落ちついて居られなかつたように思う。そういう中での赴任だったので期待が大きかつた。今は交通が便利になつたので様子が違ふと思うが、当時大宮から池袋回りであれ川越、八高線回りであれ2時間近くかかつたと思う。乗り換えの便利さから八高線回りで乗り継いで行くことにした。しかし乗り継ぎ時間を見ていなかつたため意に反して、約束時間に遅れてしまつた。そこで他の院生を大幅に待たせてしまつた。自宅の場所が略図ではよくわからないので自宅に電話を入れたら、駅まで迎えに来てもらふことになつた。その時初めて見せた出で立ちは、虚を突かれたと言つて良いだろう。三月の春うららかな晴天なのに長靴でどたどたと歩いていらつしやつたのである。引越し

なので我々もむさい格好はしていたが長靴までは思いが及ばなかつた。しかも引越し先の住まいは(事情があつたのであろうが)、これまた驚きの茅葺きの「向井去来の庵」だったのである。特に都会育ちの二人の院生は目を疑つたようである。しかし、草むら育ちの私は「あー俺つてつい最近までこれだつたんだ。すつかり忘れていた」と急に古里を思い出し、親近感を無性に感じてしまつた。もう一つ同じ例をあげよう。平成六年(?)の教育方法研究会の夏合宿が湯沢で行われた。魚野川の梁場にでかけ鮎を食べ、しばしくつろいだ後戻ることにした。少し散歩がてら歩いたら突然我慢できなくなつたのである。空中に虹を描いたのである。しかし残念ながらブロッケンまでは確認できなかった。多少は空に遠慮されたのかもしれない。外見では推し量れない豪放磊落の人でもある。

先生はまた人を育てるのが上手である。筑波は元気が無いと言うがとんでもない。方法研究室では少しづつ若い研究者が育ち、もうじき全国区になんなんとする研究者がごろごろいる。S・F・H・S君等である。将来が榮しみである。ぜひ先生の期待に答え、過去のくすんだ榮光に引導を渡し、新しい教育研究の世界を構築するため

に挑戦して欲しいものである。特にこれからは国内よりも世界を相手にどんどん発信し、リードできる教育研究者になつて欲しい。それにひきかえ、我々の世代は私を含め、いろいろな後遺症が響いているにせよ、今のところ残念ながら元気が無い。いまなお自戒しきりである。

先生のこうした地味で飾らない堅実な整地作業により、やがていずれもが世界の大輪となるのではないかと密かに期待している。先生、これからも育ての作業を継続し、そして育ての教育哲学及び方法（秘訣）をぜひ著して下さい。期待しています。

長谷川栄先生のつくられる雰囲気

吉 江 森 男

長谷川 栄先生には、もうずいぶんと長い年月お世話になつてきました。掌のなかで生活させていただいているといった感覚を持つております。先生が主宰される研究会での発言などから、平易なお言葉で本質的なことを指摘され、広い判断を示される様子を拝見してきました。先生の物の見方を、私は、よく理解できないなりに、

手本にさせていただいてきたように思います。この影響は、研究会に限らず、世間一般のことにも及んでいます。

私事になり恐縮ですが、私は物理実験の教室で教育を受け、周囲にご迷惑をかけながら教育機器センターに就職し、昭和五十年からしばらく行われたCAIシステムの開発に携わりました。そのなかで、昭和五十四年に教育学系に所属させていただくことになりました。この頃、国立教育研究所から移転されたCAIシステムを教育方法の研究室でも利用していただいたのは、良い思い出となっております。長谷川先生は、所属させていただくようになる組織内の相談の頃から、教育学系の教育方法分野で受け入れの責任を負ってくださいました。個人的にはたいへん大きな転機でした。今思えば、突然に飛び込んだ機器のハードウェア的なことにしか視野を持たなかった者を教育学の専門に導き入れてくださるには、周囲に対する説得と本人の指導にたいへんなご苦労があったことと想像します。今でも専門の面ではそのような迷惑をおかけし続けているのではないかと思います。

研究室の諸先生のお世話で視聴覚教育の勉強をさせていただいたり、コンピュータネットワークの教育への利用を考えたり、教育機器センターで進められている大学

教育における教育メディアの活用の仕事やその開発に携わるとき、最近、これらの活動が「教育方法」の中に位置づけられることにたいへん大きな安心と意味づけを感じています。長谷川先生がつくられている学問的な環境に身を置き、その雰囲気を感じながら、実務的でつたない仕事しかできませんが、これらに関わっていくことができるのはありがたいことです。この雰囲気は、実験物理の教室で与えていただいた、手を使わない者は発達しないという考えと共に、私が仕事や生活をするときの気持ちを作っています。

これからも、長谷川先生の物事にあたられるときの雰囲気や様子を拝見したことを思い出して、それを大学生活に生かしていきたいと思います。また、研究会などでお会いしご指導を賜りたいと存じます。どうか、長谷川先生にはご健康にご注意いただき、これからも豊かなご活動をずっと続けてくださいますようお願い致します。

南国土佐で思う先生の恩

吉田 武 男

だれにとつても、一人前になる過程の中で、実の親のように、お世話になった人がいるのではないでしょうか。私も、その例にもれず、多くの方々のお世話になりました。その中でも、この人との出会いがなかったら現在の自分などとても考えられない、というような人たちが現実におられます。長谷川先生は、迷惑だと感じておられると思いますが、私にとつては、そうした人たちの一人です。研究者の端くれとしての今の自分を回顧するとき、長谷川先生は、奈良教育大学専攻科時代の山口満先生（現・筑波大学教授）と並んで、私にとつてこの道を拓いていただいた、かけがえのない先生なのです。

筑波大学大学院修士課程の一年次のときに、ドイツ留学からお帰りになって間もない長谷川先生にお願いして、私の指導教官になっていただきました。それ以来、公私にわたってお世話になって、仲人まで引き受けていただき、現在に至っております。今、大学院時代を振り返ってみるとき、研究テーマをはじめ、研究にかかわる

すべてのことに對して、好き勝手に自由にやらせていた
だいたうえに、心の暖まる指導と配慮をしていたのだ、
という思いが強く残っています。

過去のことを思い出してみるとき、次のようなことを
今でも覚えています。修士課程の二年次に、一年間、立
教大学大学院の長尾十三三先生のゼミに参加しました。
長尾先生は、シユタイナーについて、詳しく論究してい
た数少ない研究者であつたからです。厚かましくも、長
尾先生には直談判して、先生のゼミへの参加をお願いし
たとき、先生からは、承諾の条件として、二つのことが
提示されました。一つは、一年間を通して筑波から来れ
るのか、ということでした。いま一つは、指導教官の許
可を得ることでした。前者については、自分自身のこと
ですから問題はなかつたのですが、後者については、指
導教官の意向があることので、少し不安がありました。
早速、長谷川先生に相談したところ、先生からは「長尾
先生はりっぱな先生だから、しっかり勉強して来なさ
い」、という趣旨の言葉が返ってきました。少し心の狭
い先生であるなら、そうした行動に對して、反対されて
いたのでは、と思つたのです。その意味で、長谷川先生の
返答は、教育者・研究者としての器の大きさを、私の心

に、まず最初に感じさせることになりました。

それと同じようなことが、博士課程の在籍のときにあ
りました。当時、国立教育研究所におられた天野正治先
生のところに、シユタイナー学校の現状が知りたくて、
何度か話を伺いに行きました。その折に、天野先生から、
ドイツ教育研究会に出席しませんか、というお誘いを受
けました。それで、一応、長谷川先生にも断つておこう
と思ひ、その旨を伝えたところ、「天野先生はよく知つ
てるよ。以前に、その研究会で私も発表させられました。
しっかり勉強して来たら」と言つて、快く賛同してい
ただきました。

また、このようなこともありました。話は前後します
が、筑波大学の修士課程から博士課程に進むとき、私は
就職の当てもなく、博士課程の入試に落ちれば後がない
ので、他大学の大学院も受験しようと考えていました。
そのことについても先生に相談したところ、「他大
学を受験してもよいですよ。調査書が必要なら、私でよ
かつたら書いてあげますよ」、と言つてくださいました。
結局、他大学の大学院にも願書を提出しましたが、調査
書には学部の指導教官のものでよかつたので、長谷川先
生に書いていただく必要はなくなりました。幸運にも筑

波大学の博士課程に合格でき、しかも早く結果がわかったので、他大学に受験する必要もなくなりましたが、「必要なら、私でよかつたら書いてあげますよ」と言ってくださったことが、教育者として、いやそれ以上に人間として、大きな器で、しかも心の暖かい先生だなと、私には強く印象として残りました。

今、縁あつて、高知大学で専攻科の一人の学生を指導しています。その学生は、シュタイナー教育を勉強したくて、就職をやめてまで専攻科に入学してきました。そんな学生ですので、何でも意欲的に勉強します。大学の休みの日には、その学生は、近くの児童相談所に、カウンセラーのようなことをやりに行っています。あいにく、私には、カウンセラーは人の心（いや、それ以上に人生）を軽々しくもてあそぶ（相手の身になるふりをして、相手をたくみにマインド・コントロールする）偽善者、というイメージが強いのです（もちろん、人格的にすばらしいカウンセラーも現実には多数いるとは思いますが）。したがって、そんなところに行くなど言いたいのですが、ケースは違うけれども、長谷川先生は私の好きなように勉強させてくれたではないか、と自分に言い聞かせ、自分の価値観を学生に押しつけないようにして、自由にや

らせておきます。小さな器の私が、長谷川先生に一步でも近づくよう、大きな器のふりをしてしているわけです。自分に似つかわしくないことをすると疲れますが、教育者としての心の修業だと思ふようにしています。

また、その学生は、入学当時には、ドイツ語の基礎文法もわからず、とてもシュタイナーの原典を読める状態ではありませんでした。例えば、一つの文章の訳を作るのに、ノートの一頁に、辞書で調べた単語の意味すべてと、文法書で調べた語尾変化が書かれていたものでした。まさに、ただ意欲だけが表れているという状態でした。ところが、週二回、シュタイナーの文献を読む機会を設けて続けているうちに、持ち前の意欲もあつてか、最近では、学生もけっこう読めるようになりました。その指導過程の中で、学生ができない様子を見てみると、ふと心に浮かぶのは、能力の乏しい私を、長谷川先生はよくも見捨てないで暖かく指導してくれたな、という感謝の思いです。そして、いつも思い直しては、今は、私が学生に対して長谷川先生の役を演じなければ、と心で言い聞かせています。

実は今日、この文章を、日曜日の研究室で書いています。昨晩、その学生から電話があり、ある文献を至急見

せてほしいということなので、日曜日に大学に来て、この作業をしながら学生を待っています。今、その学生が来て、文献を持って帰ったところです。先にも述べましたが、進路を変更してまで、私に指導を受けに来た学生ですから、微力ながらも私も責任をもって教育しなければなりません。そうした責任ということを意識すると、一人のまじめな学生を一年間指導するだけでもたいへんなのに、何年にもわたって、できの悪い私を指導してもらったと思うと、長谷川先生には、ただただ頭が下がる思いです。「子を持つて知る親の恩」という諺がありませんが、それになぞらえて、「学生を持つて知る先生の恩」というのが、長谷川先生に対する、南国土佐での今の私の心境です。

本当に、これまでのご指導とご配慮、ありがとうございます。どうぞ、これからもお体をたいせつになさって、よりいっそうのご発展とご活躍を、心よりお祈りいたします。私も、先生から見捨てられないよう、教育・研究活動に精進してまいりたいと思います。これからも、ご指導の程、よろしくお願いいたします。

南国土佐の研究室より感謝の思いを込めて

筑波大学の教育方法学

渡 辺 光 雄

茗溪の教育方法を考えるとき、その伝統は、篠原助市、富田竹三郎、井坂行男、そして、長谷川栄各先生の名前で綴ることが出来ます。閉学の東京教育大学から、新構想大学として創設された筑波大学に故井坂行男先生が受け渡した教育方法学の伝統は、長谷川栄先生によって培われました。

長谷川先生は、○ヴィルマンの『社会研究および陶冶の歴史との関係にもとづく陶冶論としての教授学』の共訳によるヴィルマンの「陶冶論としての教授学」のわがくにへの紹介(1973年)、あるいは、「ヴィルマンの『発生的方法』の教授学的意義」(1986年)や「ヴィルマンの大学時代のブルシェンシャフトにおける活動」(1986年)などの一連のヴィルマン研究成果をはじめ、これまで、多数のドイツ教授学関連の研究成果を発表してこられました。先生が我が国におけるドイツ教授学研究者として有名であることは、言うまでもありません。そのなかで、私に影響を与えたものが、山田栄博士退官記念論

文集『教育課程と世界観』に掲載された論文「教材構成におけるエクセン普拉リツシュ方式の意味」(1966年)と「範例方式と教科」(1972年)でした。

昭和四十一年、四十二年度に東京教育大学大学院教育学研究科修士課程で私は修士論文を作成しました。このときの論文のテーマは、≡クラフキの範疇的陶冶論を考察することにありました。この考察にさいし、私は、とりわけ、クラフキの範疇的陶冶論の教育学上の意義づけを長谷川先生の論文「教材構成におけるエクセン普拉リツシュ方式の意味」によつて求めることができました。クラフキによる範疇的陶冶の概念の提唱は、旧西ドイツにおける一九五〇年代の教材過剰を克服する試みの一つでしたが、この概念の提唱は、抽象度の高い哲学レベルで行われたため、その解釈には難解さばかりが残りました。大学院の修士課程でその難解さに悪戦苦闘しているときに光明を与えてくれましたのが先の論文でした。それから20年の歳月を経て、私は、「クラフキの『二面的開示』に関する研究」をテーマとする学位申請論文を作成し、長谷川先生に主査になっていただき、博士(教育学)の学位を取得することができました。

学位論文を作成する中で私にとつてもっとも重要なこ

とに一つに、テーマになっているクラフキ博士自身の学問的系譜がありました。これについて、私は、いろいろの文献資料を付け合わせて傍証しようとはやり悪戦苦闘しました。その折、ちょうど、長谷川先生は、文部省在外研究でクラフキ博士のところで研究されており、同博士が自ら記した自分自身の学問的系譜の資料を入手され、それを私に見せて下さいました。私は、この資料により、クラフキ教授学の根幹を知ることができ、学位論文の骨子をつくることができました。先生には、学位論文作成のさいに、大変にお世話になりました次第です。厚く感謝を申し上げます。

長谷川先生の元からは多くの教え子が、若い研究者が巣立って行きました。大学教授の役割には、巣立つ大学院生が課程博士の学位を取得して修了できるように指導し、また、すでに大学院を単位取得退学した卒業生に論文博士の学位を取得できるように世話することがあります。長谷川先生が主査になられて課程博士の学位を取得した大学院生、そして、論文博士の学位を取得した教育方法学関係の卒業生は、五指に余ります。これらの学位取得者の輩出は、教育方法学に伝わる若溪の伝統の継承でもあります。

東京教育大学から筑波大学への歴史の歩みは、当時の社会的状況の中で、教育方法学に伝わる良き若溪の伝統を必ずしも確実に継承する態勢にありませんでした。そのような状況の中で、長谷川先生は、茗溪の教育方法学の伝統を確実に筑波大学の教育方法学に継承され、後に続く私たちに手渡されたのです。この継承を、私たちは大事に培いたいと思います。

先生の言葉

桂 直美

毎週火曜の研究会で、あるいは就職後も折々の研究会の席上で、長谷川先生からいただく言葉はいつも一言一言と短いものでした。しかしその言葉はいつも私の発表の一番の弱点を照らし出し、次への一歩を示してくださいましたのであったと思います。院生の頃は勢いにまかせて反論を試みたこともありましたが、後々までその言葉を思い返しては、改めて自分の未熟さをかみしめたものでした。また忘れられないのは、山中湖の合宿でいただいた「質が低いよ」の一言です。一夏の間何度も耳の奥

で鳴っていたほどこの時の言葉はショックでしたが、厳しい中に「あなたならもつと」という暖かいお叱りをいただいた気がして、勢い込んで勉強しました。結果的にはその時の論文は後で賞をいただくこともでき、思い出に残るものになりました。

二年間の教員経験の後に教育学を志した私には、長谷川先生の何気ないお話しの中で、先生の教職時代の体験談を伺えたことも印象的でした。長い年月を経てなお元教え子の方と絆を持っていらつしやることにも打たれませんでした。教育現場に根をおろすことのできる教育学を私も目指していたと思います。これからも変わらずご指導下さい。

長谷川先生、ありがとう

神田 伸生

長谷川先生、御無沙汰致しまして申し訳ありません。先生とのお付き合いの中で何度この「申し訳ありません」を繰り返したことでしょうか。(申し訳ありません)

今、こちらの短大に来て、初めて「保育研究」という

研究レポートの指導をしております。いろいろな学生がおります。課題は漠然としてもコツコツ努力をしてきた学生。課題がコロコロ変わって右往左往し続ける学生。課題に圧倒されて敗けてしまいそうな学生……実に様々です。

そんな学生たちの姿に二十数年前の自分をダブらせてこの「贈る言葉」を書いております。

二十数年前の自分を自己評価すると、「課題に圧倒されて敗けてしまいそう」なうえに、時々「糸が切れてしまいうタコ」のような自分の姿が浮かんできます。そして同時に、「切れた糸」を何度も結び直してくださった先生のことを思い出しております。

この「教え」は、今の私にとって貴重な「教え」になっております。十二月十七日が「保育研究」の研究レポートの締切日ですが、二十数年前の私のような「糸の切れてしまいそうな学生」たちが、「結び目」を確かめるように嬉しそうな表情でレポートを持ってきました。

気が短く、怒りっぽい私ですが、「保育研究」の指導に関しては、粘り強く、誠実に、優しく指導していたようです。「糸の切れてしまいそうな学生」の一人が、こう言ってくれました。「保育研究、先生についてよかつ

た。何度も挫けたけど、学生をやったという気がするし、勉強続けて専攻科に進もうかと思っております」と。

長谷川先生、二十数年前、私は、この学生のように素直に御礼の言葉を申し上げましたでしょうか。自信がありませんので、改めて御礼を申し上げたいと思います。

「長谷川先生、ありがとうございます。何度も挫けそうになつたけど……」

これからは、出来るだけ「申し訳ありません」を少なくし、「申し訳のある」お付き合いをしたいと思っておりますので、宜しく御指導をお願い致します。

スポーツマンとしての長谷川先生

島田茂樹

私は、長谷川先生がご退官されるその年まで、筑波大学での総合指導やゼミや山中湖合宿において、そして教育方法研究会の研究会において、さまざまに指導を受けてきました。そのような場を通して私は先生から、研究とは何かということや学ばせていただいたと思えます。大学院で学んでいる私としては、まさに今、学んで

いる最中であり、これから「研究とは何か」の答えを追求しながら、自分の研究を進めていくことが、先生への贈ることになるのではないかと思います。

研究の面はもちろんですが、それ以外のことで強く印象に残っていることがあります。それは、スポーツマンとしての先生です。教育学系では、春と秋に学系長杯争奪ソフトボール大会が行われます。先生はソフトボールがお好きで、お好きだけでなく技術の方もかなりのものでした。ソフトボールをしているときの先生は、失礼ながらお年のことなど全く感じさせない軽快な動きをしておられました。停年を迎えた今年も、春と秋の大会の両方に出場され、投打に大活躍されました。

教育方法研究室は、私が大学院にいるときは方法研究室だけで1チームを組めるだけの人数がそろわなかったので、ソフトボール大会ではどうしても他の研究室との混成チームにならざるをえませんでした。しかしながら、今年の春の大会は混成チームながら、「教育方法チーム」という名を掲げて、見事優勝することができました。先生は主にピッチャーをされ、巧みな投球で所要所を抑さえ、打者としても、右に左に巧みにヒットを打ち分けられました。そのプレイは、本当にこの人は今年退官を

迎えられる方かと思わせるほどの活躍ぶりでした。

長谷川先生は、まさに文武両道を行っておられる方だと思います。そのような姿を目標として、頑張りたいと思います。今後も研究会などのご指導よろしくお願ひします。

先生の短く重い論文指導

小笠原 喜 康

「長谷川先生という方は、どんな方ですか？」と尋ねられたら、先生ぐらい紹介しやすい人は少ない。物静かなドイツ教育学の研究者で、ともかく穏やかでやさしい人。私は筑波での最初の弟子であるが、私と正反対の雰囲気。とても一番弟子などとは、恥ずかしくていえない。などといえば、誰でも納得してくれる。

しかしそんな先生であるが、ドイツでのご留学を終えられてからは、少し変わられたように思う。もちろん、物静かで、穏やかで、やさしいというところには何の変りもない。だがぐんと論理的な議論を好むようになった。それまでは、院生の議論にひたすら耳を傾けてい

らっしやった。だがドイツから帰られてからは、その議論に論理的組立と明晰な表現を求めようになられた。

そんな頃に、私の論文の草稿を細かく直して下さったことがある。「くなのである」「くであるように思われる」という文末表現を一つ一つ直して下さった。「くなのである」は感情的断定であるので、これの多用は好ましくない。逆に、「くであるように思われる」は曖昧な逃げの表現であるので、論理的な明晰さを妨げる。というのが、その時の教えであった。たったこれだけのことであるが、その後ずっと私の中に残ることとなった。今自分が学生の論文を指導する立場になって、必ずいうのがこのことだからである。

誰でも悩み試行錯誤することであるが、学生の論文指導は難しい。いい過ぎると個性を潰し依存的にさせ、ひどい場合には完成を危うくする。なにもいわないでいると、進行がおぼつかなくなり最後に駆け込み的論文になることも多い。個性を潰さず、かつ仕上がりの良い論文にさせるには、どうしたら良いものか。多弁を弄さず、ポイントを押さえるにはどうしたら良いものか。先生が指導して下さったところと同じ年回りになった今、あの時のご指導の重みが一段と感じられるようになってきた。